

## 2019年度 静岡県言語聴覚士会 講演会 開催

2019年6月9日(日)に、静岡県男女共同参画センターあざれあ501会議室にて、2019年度 静岡県言語聴覚士会講演会を実施しました。

9:50～11:50 「幼児期の発達障害や言葉の遅れがある児童への支援と実践～  
個別支援のポイント」  
なかじまクリニック・ラビット発達臨床研究所 平岩 幹男 先生

他機関で診断や支援を受けているが、さらなる支援を求めてやってくる親子に対し、平岩先生ご自身が子どもの発達段階に合わせて個別療育の助言を行い、ご家族に実際の取り組みのポイントを「見せて」伝えていらっしゃるようで、その具体的な支援方法について、ご講義いただきました。「自閉症」と診断がつく子どもに対する「ブラックイメージ」ができてしまっているが、本人の興味や認知に合わせて適切な個別支援することにより、3歳で無発語あるいは単語の発話でも、通常学級を利用する子どももおり、平岩先生の支援を受けた方の半数近くは、通常学級に進まれているそうです。また、早期の介入も大切で、



個別療育を4歳までに開始した場合と7歳以降では、予後に差が出てくるそうです。家庭でも個別にできることはたくさんあり、「子どもとのつながり感」を持たず、打ちひしがれている親に対し、対応方法を伝えていく大切さを教えていただきました。介入のポイントは、目先のことでなく、「大人になった時の生活の質を高めるための支援」を考えることだそうです。特に非言語コミュニケーションの基礎を作ることが大切で、くすぐって声や笑顔を引き出す・アイコンタクトをつけるため大人が一瞬でも目を見ながら言葉をかけていく・手遊びや絵描き歌で動作や音声模倣を引き出す・手を挙げる・大人とタッチやハイタッチをするなどの具体的な手法を教えていただきました。

指差しのうながし方や「絶対選ばない物」を使った二者択一の指差しやyes-noの意思表示をすることなど、かなり細かい点までご教示いただきました。文字が読める子どもは率先して使う・会話を成立させるための大人側の質問の工夫についてもお話いただきました。

発達障害のお子さんには、怒られることが多いため自己肯定感や自尊感情が低下しやすく、「喜びを共有するため」に「子供の表情が変わる」ようにほめることがとても重要で、そのためのほめ方・ほめる言葉・1日50回のお手伝いによる「ありがとう、という機会作り」や叱らない大人の行動のポイントも、教えていただきました。また、STである私たちに、もっと活躍してほしい分野として、「発達性読み書き障害」を挙げて下さいました。

平岩先生が実践されている個別療育は、まさに私達STが保護者に伝えるべきことであり、すぐに臨床に取り入れられることばかりでした。

### アンケートの感想

- ・臨床場面を踏まえて例を挙げて下さり、具体的にイメージしやすかった。
- ・きめ細やかな支援のポイントを教えていただき、今後の臨床の参考になった。



- ・基礎から実際の臨床に役立つことまで、学ぶことができた。小児の発達について、改めて学べた。
- ・言語訓練の前段階（視線・タッチなど）の方法を学べた。
- ・自己肯定感を低下させないために、ほめることが大切だと思うので、練習していきたい。
- ・家族指導の重要性を再確認できた。ご家族への説明の仕方が参考になった。目の前の自分の子が「かわいい」と思えるような具体策を伝えられるようにしたい。親に見本を見せることを意識しているつもりだったが、十分にできていなかったと反省した。
- ・「家庭での取り組みの程度や方法がしつこすぎると、子どもが嫌いになってしまうことが多い」という内容が、良かれと思ってたくさんのことを親御さんをお願いすると、家で集中して取り組んでしまうため、子どものモチベーションが下がる、という自分の経験と重なった。
- ・自閉症のブラックイメージに染まっている自分に気づいた。
- ・負の経験を積んでほしくないなので、ご家族に「してほしいことを具体的に伝えて下さい」とお願いしていたが、言い方など、もっと細かく伝える必要があると感じた。
- ・ほめること・しかることは、療育の中だけでなく、家庭でも気を付けたいと思った。「注意する時は3秒待つ・ほめる時は1秒以内に」は、自分の生活に取り入れていきたい。
- ・目先の育ちではなく、大人になった時のことを考えて、今やるべきことを親御さんに少しずつでも伝えていくことの大切さ・スモールステップの大切さを教えていただいた。
- ・非言語コミュニケーションやほめることは、成人にも通じることだと思った。
- ・とてもわかりやすい講義で、時間が過ぎるのが、あっという間だった。

**14:10～16:10 「高次脳機能障害者の社会復帰支援」**

矢木脳神経外科病院 NPO 法人 Re ジョブ大阪 西村 紀子 先生

西村先生は、老健・療養病院・総合病院・回復期病院・訪問リハと豊富な臨床経験に裏打ちされた高次脳機能障害に関する評価や訓練・家族支援のポイントについて、とても明快な語り口で、ご講演下さいました。三井三池炭鉱事件や阪神淡路大震災・東日本大震災などの事故・事件の背後には、医療者が見つけられなかった高次脳機能障害の当事者がたくさんいたはずで、言語聴覚士は、診断がついていなくても、評価する中で、高次脳機能障害を見落とさないことが、最大の支援ということ。高次脳機能障害は、「身体」「認知」「心」の3つが障害されるが、STは、その中でも「認知」の部分の正しく評価することが求められるそうです。

評価で一番大切なことは「行動観察」で、院内生活は問題なく過ごせても、社会に出てうまく生活できるか、という視点が大切だそうです。意識障害や精神機能・注意機能・記憶障害・遂行機能・社会的行動・会話に関する観察ポイントを具体的に教えていただきました。ご家族やご本人に「社会に戻った時に、こんなことが生じるかもしれない」と評価の結果をきちんと伝えておくことは、失敗への対応ができ、心の問題に移行することを防ぐことにもなり重要だそうです。また、会話の内容によって、認知症と誤解されてしまうことがあるので、その鑑別ができることも必要になるそうです。



訓練については、大阪府高次脳機能障害ハンドブックの神経心理ピラミッドを使って、表層に出ている問題のみを訓練

せず、積み上げ式で行う必要性を説明して下さいました。ST の高次脳機能障害の訓練は、「おもしろくない」が、訓練の意味を伝え、男性には一般化する、数値化して訓練効果が見える化していくことで、訓練目標を共有し、意義を伝えていくことが大切になるそうです、また ST ならではの訓練として、「話を止める練習」「話の内容を書きとって確認する」「最初に話したことを確認する」といった会話を工夫して訓練に応用していくことも、教えていただきました。さらに、本人に障害に対する「気づき」をうながすことで、社会復帰した後に他者に援助を求められることも、大切になるそうです。家族支援や本人支援のポイントとして、状況について専門用語を使わずに（情報処理や脳疲労、ということばも相手にとっては専門用語）、相手の生活場面に置き換えて具体的に伝えること・「できる」ことも伝えること・改善には時間がかかるが少しずつ良くなっていくことを伝えることを教えていただきました。

講義の最後に、西村先生が担当された患者様が、「口笛」を吹くことができ、口笛カフェに行き、自分の居場所ができたことで、機能改善してきた、というエピソードを通して「その人の生活の延長線上に復帰があり」「社会的不利があれば障害を受容できない」という視点を持つことが必要であると、ご教示いただきました。

#### アンケートの感想

- ・内容が具体的で、わかりやすかった。実際の臨床での方法が、とてもわかりやすかった。体験談をまじえたわかりやすい講義だった。
- ・評価の大切さを改めて感じた。観察の具体例や生活場面で見られる症状をわかりやすく説明していただいたことを、臨床に生かしたい。一瞬の表情の変化や訓練室以外の様子も、しっかり観察していかなければいけないと、改めて感じた。
- ・急性期で診断がついていないから、高次脳機能障害が全く無い、ではなく、回復期・療養期でも気づけるようにしていかなければならないと思った。
- ・患者さんご本人・ご家族とかかわっていく上での、具体的なアイデアを、たくさんいただいた。
- ・注意機能低下を見逃さず、臨床につなげることは、とても勉強になった。
- ・検査結果ばかりで改善を判断していたため、行動観察をして日常生活にも目を向けて再評価していきたい。
- ・ST としてできることを、今一度考えさせられた。
- ・患者本人だけでなく、ご家族のケアが大切であると思った。ST や医療職の言葉かけ一つで、相手が傷つくこともあると知り、言葉選び・声のかけ方について気をつけていきたい。
- ・病院でのリハビリだけでなく、軽度の人ほど、在宅に戻った時に社会生活で何らかの問題が生じ、失敗行動を繰り返して心の問題が大きくなるように、事前のフォローを行う必要性を学ぶことができました。病院生活では、日常に戻った時に困ることが、想像しにくいと思った。
- ・「気づき」の大切さを感じた。病識がなくリハビリ拒否がある患者様のことで悩んでいたため、この講義を聞いてよかった。神経ピラミッドと検査結果を使って、気づきをうながしていきたい。
- ・長期的な支援ができないことが問題であり、ST としても自分の関わりの結果がわからないことが、臨床の成長につながりにくいと感じた。



#### 講演会運営に関する要望・改善提案

- 挙手をして質問しにくいので、質問を紙に書いて回収し、代読してほしい。
- 講師に合わせて、細やかにマイク音量を調整してほしい。